

絵本の読み聞かせ効果について - 「言語指導法」受講学生の意識調査と保育現場インタビューをもとに

-

著者	藤重 育子
雑誌名	東邦学誌
巻	41
号	3
ページ	65-79
発行年	2012-12-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1532/00000287/

絵本の読み聞かせ効果について
—「言語指導法」受講学生の意識調査と保育現場インタビューをもとに—

藤 重 育 子

愛知東邦大学

絵本の読み聞かせ効果について

—「言語指導法」受講学生の意識調査と保育現場インタビューをもとに—

藤 重 育 子

目 次

- I 研究の目的
 - 1. 先行研究
 - 2. 幼稚園教育要領・保育所保育指針における記載
- II 「言語指導法」受講学生の意識調査
 - 1. 「言語指導法」の授業報告
 - 2. 初回アンケート調査
 - 3. 質問紙調査
- III 保育現場インタビュー
 - 1. 対象者の属性
 - 2. インタビューの結果と考察
 - (1) 絵本の読み聞かせに関して
 - (2) 保育者の学生時代の振り返り
 - (3) 保育現場に就職して
- IV まとめ

I 研究の目的

筆者は2012年4月より「言語指導法」の科目を担当している。全15回の授業内容は幼稚園教育要領・保育所保育指針における保育内容「言葉」に関連した講義と学生による絵本や紙芝居などの読み聞かせ発表の実技から成る。初回授業において受講者に対して、「子どもの言葉」「言葉の発達」についていくつかの質問を行ったところ、曖昧な理解や考えが確立されていない点が多く見られた。特に受講学年が2年生以上の学生であるにも関わらず、絵本を読み聞かせる意義やその効果についてはあまり理解していないことが明らかであった。保育内容「言葉」領域に関しては、初めて受講する学生ばかりであろう。しかしながら、保育者養成課程の授業カリキュラムでは、「言葉」領域以外の他科目の授業内での取り組みにおいて、読み聞かせや子ども又は保育者の表現方法について学ぶ場は多くあったと思われる。そこで本稿では、「言語指導法」の授業報告も兼ね、学生と現場保育者との「絵本の読み聞かせ」に対する意識の差異を把握する。さらに、保育現場から得た情報を提供することにより、受講学生の疑問に対して解決を促すことや、受講学生が知識を得ることで保育現場への実習や就職にあたり役立つことを願い、よりよい教育的支援の方法を導き出すことを研究の目的とする。

1. 先行研究

絵本や絵本の読み聞かせに関する研究は、様々な視点で行われている。絵本に関しては、2000年の「子ども読書年」を契機に、絵本を使って親子の関わりを促進しようとする子育て支援事業の1つとしてブックスタートが導入され、より注目されることとなった。これは保健所、保健センターといった母子保健の部門だけでなく、図書館などの社会教育施設、保育課等の子育て支援の部門、さらに読み聞かせボランティア等地域市民など、複数の組織の連携による事業であるところに大きな特徴がある。現在各地で行われている事業について濱田（2011）は絵本によって親子を結び付けるだけではなく、子どもを取り巻く人や組織のつながりを生み出している^{〔1〕}と解釈している。保育現場における絵本の読み聞かせに関しては、齋木（2004）が、絵本は保育者と子どもが読み聞かせの機会を通して寄り添うことにより、お互いの信頼関係や愛情を育てていくことになる^{〔2〕}と述べている。また豊かな表現力や技術に裏打ちされた保育者の人となりや子どもに向けて発せられる愛情、あるいはお話に含まれるメッセージは、受け止めた子どもからまた保育者に送り出されることとなる。そのため、保育者はただ絵本を読むという技能だけではなく、豊かな表現力や技術が必須となる。その絵本選択の場面において、芸術的に優れていて言葉や文章も選び抜かれた内容で絵と文がよく合っており、作者が子どもの側に立って子どもの心を知っている「良い絵本」を保育者が選択できることが良い保育につながる^{〔3〕}と松井（1999）は説明している。また桑名（2010）によると絵本の読み聞かせについて、絵本を「語る」と捉えている。絵本を「語る」ことに関して技術的なことではなく、読み手が感動した絵本、その本のおもしろさ、楽しさ、悲しさ、悔しさ、怒り、恥ずかしさなどを子どもたちが読み手と一緒に味わってほしいという気持ちをもって読み聞かせをしてほしい^{〔4〕}と述べている。ただ感情を表現して共有するだけでなく、子どもに絵本を読み聞かせる場面において、保育者は読み聞かせる絵本の内容を理解し適切に表現できなければならない。その一つの方法として工藤（2008）は、命の大切さや死の問題についての絵本体験を増やすことで、保育者自身が読解力や表現力の向上を目指すことができる^{〔5〕}と指摘している。そして適切な言葉による説明（表現）が可能となり、子どもへの有効な働きかけがより良いものになると述べている。これは、絵本の内容に関わらず全保育者が目指すところであろう。絵本の内容に関しては松井（1999）によると、保育と直接関係しているものばかりではないが絵本が、生活や遊びの中に生かされていていたり、保育の中でリズムや造形、身体表現など表現遊びとして発展していたり、子どもたちの自然や社会との直接経験を確かなものにし、その認識を深めるためである^{〔3〕}と示している。このことは幼稚園教育要領や保育所保育指針などにも関係しているため、次節において保育内容「言葉」について記載する。

以上のことから、本学科も提唱している表現力豊かな保育者となるための教授方法のひとつとして、選択から読み聞かせにいたるまで絵本を用いた教育・保育の様々な手立てを知り得ることができる。しかしながら絵本の読み聞かせ効果に関して特化して言及されているものは少ない。さらに保育者養成校の学生と保育現場における読み聞かせの表現やその効果において考え方の相違から、課題を見つけ出し、よりよい教育方法を知る手掛かりとなることが考えられる。

2. 幼稚園教育要領・保育所保育指針における記載

保育現場において、幼稚園教育要領、保育所保育指針の保育内容5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）が関連して保育が進められている。絵本を媒体として子どもと関わる上で、保育内容「言葉」領域において「絵本」に関する記載のある項目を挙げる。

幼稚園教育要領において、ねらいでは「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。」（ねらい(3)）、内容では「絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう。」（内容(9)）、内容の取扱いでは「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。」（内容の取扱い(3)）が明記されている。

また保育所保育指針において、ねらいでは「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、保育士等や友達と心を通わせる。」（ねらい(3)）、内容では「絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう。」（内容(11)）が明記されている。

保育内容「言葉」の授業に関して神垣ら（2011）は、15回の授業時間内に絵本を紙芝居に作り替えるという内容を組み込んで実践している。そして領域「言葉」において子どもが「ことば」を聞き、「ことば」に興味を持ち「ことば」から様々なイメージを膨らませ、「ことば」と言葉をつなげる保育者の支援が必要であることを言及している。そのため、学生が「子どもは絵本にふれることで『ことば』にふれる」ということを理解し、子どもの「ことば」を育てる視点を理解することができたかどうかを図る必要がある^[6]と強調している。この方法においては、ねらいについて幼稚園教育要領保育内容「言葉」（内容(9)）と保育所保育指針保育内容「言葉」（内容(11)）について、子どもの目線に立ち、保育者養成校において受講学生に理解をさせる十分な教授方法の1つであると思われる。

Ⅱ 「言語指導法」受講学生の意識調査

1. 「言語指導法」の授業報告

愛知東邦大学人間学部子ども発達学科において、「言語指導法」は幼児保育分野（保育の内容・方法の理解に関する科目）の教職に関する科目として位置づけられている。卒業を満たす条件として必修の授業科目であり、幼稚園教諭・保育士資格に関しても必須である。

2012年度前期の授業においては2クラスに分けられており、履修者は2年生44名、3・4年生35名、合計79名であった。用いた教科書や授業内容においては15回にわたり同一のものであった。3・4年生クラスは前期途中において2週間の教育実習のため、6月に授業が2回分休講であった。その振り替えとして第10・11回目に補講授業を行ったため、出席率が低下している。受講状況については表1に示す。15回を通して2年生クラスは平均75.8%、3・4年生クラスは平均

64.4%の出席率であった。

表1. 「言語指導法」の出席状況

	2年生		3・4年生	
	人数(人)	比率(%)	人数(人)	比率(%)
第1回	35	79.5	26	74.3
第2回	34	77.3	22	62.9
第3回	36	81.8	28	80.0
第4回	33	75.0	23	65.7
第5回	35	79.5	24	68.6
第6回	32	72.7	19	54.3
第7回	35	79.5	26	74.3
第8回	33	75.0	24	68.6
第9回	32	72.7	24	68.6
第10回	32	72.7	14	40.0
第11回	28	63.6	14	40.0
第12回	33	75.0	24	68.6
第13回	33	75.0	21	60.0
第14回	35	79.5	24	68.6
第15回	34	77.3	25	71.4
平均	33	75.8	23	64.4

授業内容については、講義形式にて保育内容「言葉」についての説明をはじめ、言葉の獲得段階やその発達における諸問題、また子どもの言葉が育つ環境について保育者の役割を教授した。学生はその知識を得た上で、子どもの発達段階に応じた絵本の選択を行い、1人1冊は必ず12回目以降の授業時間内に発表する形で、絵本や紙芝居の読み聞かせに取り組んだ。

また初回の授業時間内にアンケート調査、最終授業時間内に質問紙調査を行った。その結果と考察について、次に示す。

2. 初回アンケート調査

初回授業において2年生クラス35名、3・4年生クラス26名、計61名に「子どもに読み聞かせるもの（児童文化財の記述も可）」について思いつくものをすべて記入するようたずねたアンケートを行った。結果は55名が絵本、51名が紙芝居と回答し、うた・童謡、昔話、飛び出す絵本、パネルシアター、図鑑、詩などは5名以下の回答であった（図1）。また6名は、この質問項目に対して無記入であった。この結果から、授業内における児童文化財の種類や使用方法など、学生へ教授する必要性が感じられた。

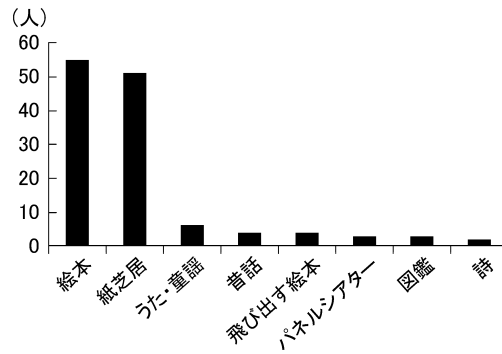


図1. 初回授業のアンケート結果

児童文化財を活用した保育実技の質的向上を検討した研究（齋木，2004）では実習学生のレポートから保育実技の中での児童文化財の展開^[2]を明らかにしている。齋木の調べによると児童文化財とは絵本、紙芝居、子どもの歌、人形劇、演劇、ペープサート、パネルシアター、エプロンシアター、玩具（遊具）、マンガ、テレビ、ラジオ、映画と多岐にわたる。神垣ら（2011）によると、絵本を開きその物語に子どもの思いや感動が添えられると、絵本と子どもの間には世界に二つとない物語が完成する^[6]。このことについては、絵本に限ったことではなく、素話や紙芝居、ペープサート、パネルシアター、人形劇などに触れる場合も同じ経験をすることができる。そのため、受講学生は、絵本はもちろんのこと様々な児童文化財を知り、それらを使用した子どもとの関わり方を把握しておく必要があると強く感じられる。

3. 質問紙調査

最終授業時間内において2年生34名、3・4年生25名、計59名に「授業への参加度」（問1～6）や、学生の意識に関して「目標」（問7・8）、「話すこと」（問9～11）についてたずねた11問から成る質問紙調査を行った。それぞれの質問項目は「1：全くあてはまらない～5：とてもあてはまる」の5件法で行った。質問項目と各クラスの平均の値を表2に示す。結果は平均的な値を示しており、「授業への参加度」（問1～6）については3.7、「目標」（問7・8）については3.6、「話すこと」（問9～11）については3.0であった。

そこで今回は、「授業への参加度」に着目し問1「授業への出席」の項目を除外した問2「積極的な取り組み」、問3「授業の役立ち」、問4「知識の増加」、問5「授業の満足感」、問6「授業の楽しさ」の5項目の合計得点（最低得点13、最高得点25）を「授業充実度」として学生ごとに算出した。さらに、「授業充実度」合計得点の中央値（19）を算出することにより、中央値未満を「授業充実度低群」（26名）、中央値を「授業充実度中群」（8名）、中央値超過を「授業充実度高群」（25名）という群分けを行った。

表 2. 質問紙調査結果

質問項目	2年生	3・4年生	全体
1 授業には休まずに出席した	3.9	3.3	3.6
2 授業に積極的に取り組んだ	3.6	3.5	3.6
3 授業が役立つと感じる	3.6	4.0	3.8
4 授業後に知識が増えた	3.6	3.8	3.7
5 満足感のある授業であった	3.6	3.3	3.5
6 授業はたのしかった	3.7	3.8	3.7
7 将来の夢・目標がある	3.9	3.8	3.9
8 将来への目標に近づいた	3.4	3.0	3.3
9 人前で話すことが好きだ	2.7	2.4	2.5
10 人前で話すことが得意だ	2.5	2.1	2.3
11 友人同士で話すことは好きだ	4.3	4.1	4.2

表 3 は、それぞれの群に対しての「目標」や「話すこと」について平均値を示したものである。結果は、授業充実度が高くなるにつれ、「将来への目標」や「目標への近づき」の平均値が高くなっていった。この「目標」に関しては、子ども発達学科を志望した学生が保育士や幼稚園教諭を目指しているため、多くの学生が目標としてそうした保育者を指すであろう。しかしながら入学当初と比べ、専門知識を勉強していくにしたがって、学生自身の意識とは異なる思いが表れているのかもしれない。「目標」をたずねた質問項目の欄に他の職業を記載している回答も見られ、直接教育に携わらなくとも子どもに関係する職業や全く異なる一般就職を希望している学生が増えていることは明らかであった。また、「目標への近づき」に対しても同様で、現在迷いの生じている学生が存在していることも把握できた。

表 3. 群ごとの学生の意識調査

	目標	目標への近づき
授業充実度低群	3.46	3.00
授業充実度中群	3.67	3.00
授業充実度高群	4.43	3.64

最終授業時間内において、先述した11問の質問項目のほか、「絵本の読み聞かせ効果」について自由記述と「こんなことを知りたかった」という自由記述の回答欄を設けた。問 7 「目標があるか」についても 5 件法でたずねているため、「4 : あてはまる」「5 : とてもあてはまる」と回答している学生を「目標有」、「1 : 全くあてはまらない」「2 : あてはまらない」と回答している学生を「目標無」とし、「目標有」の学生のうち16名、「目標無」の学生のうち2名の記述が見られた(表 4)。「目標有」の学生16名においては、いずれも授業充実度高群に所属していた。人数のみでの判断はできないが、記述内容について「目標無」では一般的に期待されるであろう事柄や結果として獲得できるものであった。一方で、「目標有」の記述では、「目標無」で見られた

内容も含まれているが、より子どもの目線に立った感情や、子どもがどのような方法で何を獲得していくのか、など詳細に記述されていた。表4における①⑫⑭⑯の回答のようにイメージや発想力、楽しさやワクワク感など豊かな表現が多く見られた。西本（2003）によると、絵本の読み聞かせでは、聴覚と視覚が渾然一体となりどんどん絵本に引き込まれていくことは、まず文字に目がいってしまう大人には難しいことであり、子どもだけの特権である^[7]と表現している。また実技において、同じ絵本の読み聞かせを行った場合でも、発表学生の個性やそこからくる読み方、引き込み方の違いにより印象は全く異なり、読み聞かせ効果について実感した学生が多く存在した。これは③⑦⑬の回答を見る限り理解できる。このことから、読み聞かせにおいても保育者側の表現力を高めることで、よりよい保育に結びつくことが明らかである。

しかしながら現時点において受講学生は、その表現力に関して学修中である。そこで、同様の質問を、養成校を卒業し実際に保育現場で日々読み聞かせを行っているであろう保育者にインタビュー形式にて行った。結果については、次章で説明することとする。

表4. 絵本の読み聞かせ効果（学生の自由記述より）

目標	自由記述
有	① 絵本の中の世界観を楽しむことができる
	② 目で見て楽しむだけではなく擬音語擬態語などの音を感じとることなどで、体全体で楽しむことができる
	③ 読み方によっては子どもを引き付ける力がある
	④ 集中力が身に付く
	⑤ 季節や日常生活のことがわかるようになる
	⑥ 先生やクラスのみならずイメージを共有できてコミュニケーションが取りやすくなる
	⑦ イメージの膨らみやすい表現をしている先生の読み聞かせは素直に楽しめる
	⑧ 子どもが真剣に聞き入れることで絵本が気持ちを落ち着かせることになり、自然に集中力がつくことにもなる
	⑨ 物語の内容を知り、優しい気持ちになれる
	⑩ 服の着脱や食事方法など自分の身につけた生活習慣の再確認ができる
	⑪ やって良いことと悪いことやどのように行動すべきかを子ども自身が確認できる
	⑫ 楽しさやワクワク感を味わえる
	⑬ 先生が楽しむとその反応を見て自然と子ども達も盛り上がるように思う
	⑭ 感性が豊かになり、子どもの表現の幅が広がる
	⑮ 発想力や考える力がつき、言葉のレパートリーが増える
	⑯ 子どもが夢の世界に入ることができる場所でありその世界の中で様々な感情を知ることができる
無	⑰ 想像力を高める
	⑱ 子どもの言葉を聞く力、話す力をつけることができる

また、「こんなことを知りたかった」という自由記述欄には4名からの回答が得られた。「読み聞かせのポイントをもっと詳しく教えて欲しい」や「おすすめの絵本は何か」、「幼稚園で人気のある本は何か」などの記入であった。このことに関しても、次章保育現場インタビューにおいて併せて詳しく記載することとする。

以上のことから、読み聞かせ効果を高めるためには、やはり読み聞かせる保育者の表現力が必要であると、学生自身が考えていることは明らかであった。そのための指導は欠かせないが、学

生自身が積極的に授業を受講し知識を得るための努力と目標を持ち続ける姿勢が第一に必要であると感じられた。またこれらは、授業担当者である筆者自身も反省点として、次年度の同科目の授業への工夫を考えさせられた。

Ⅲ 保育現場インタビュー

1. 対象者の属性

授業を進めていく中で、疑問点などを解決し学生へ還元するため、また「絵本の読み聞かせ」に関する意識や教育的な効果について学生の意識との比較を行うため、保育現場でのインタビュー調査を試みた。

インタビュー調査は2012年7～8月に行われた。対象はO市、N市において幼稚園教諭もしくは保育士として勤務されている女性教員12名であり、詳細は私立幼稚園所属が5名、私立保育所所属が2名、私立子ども園所属が5名であった。また、それぞれの出身養成校が専門学校、短期大学、4年制大学など様々であった。教員歴に関しては表5に示す。12名の全対象者が養成校卒業後、現在の所属園でのみ勤務されている。今回は、授業を通して学生への還元も目標の1つとして調査を行っているため、「絵本の読み聞かせ」に関しても、インタビュー対象者の養成校時代における授業内容や学生の頃感じていたこともたずねるなど心がけた。そして受講学生がより身近に感じやすく近い将来の見通しが持てるように、インタビュー内容も変化させながら行い、教員歴5年以下の比較的若い教員を対象者として依頼した。担当クラスに関しては表6に示す。1・2年目の教員の担当は、フリーや複数担任の一人となり、先輩教員の保育場면을学習できる機会が多くあるようであった。

表5. 対象者の教員歴

教員歴	人数
1年目	2
2年目	4
3年目	3
5年目	3
合計	12

表6. 対象者の担当クラス

クラス	人数
1歳児	2
3歳児	1
4歳児	3
5歳児	2
フリー	4
合計	12

2. インタビューの結果と考察

インタビュー内容については「言葉」に関連しながら (1) 「絵本の読み聞かせ」について (2) 学生の頃の振り返り (3) 卒業後、保育現場に就職してから、以上の3点に絞り進めていくこととする。

(1)「絵本の読み聞かせ」に関して

絵本の読み聞かせに関して、所属園での読み聞かせの頻度についてたずねた結果を表7に示す。すべての園で1日に1冊以上読み聞かせを行っており2～5冊読み聞かせを行っている園が半数以上を占めていた。内容をたずねると、1週間を通して同じ絵本を扱っているなど、絵本ののべ冊数は少ない結果であったが、これは繰り返して読み聞かせる教員の意図的な場合と子どもが気に入って同じ絵本に集中しているための両方が理由として挙げられていた。また、いずれの園も行事や日々の保育スケジュールの関係上、絵本の読み聞かせとして設けられた時間は5～10分程度であったことも、1日に少ない冊数との回答にも納得がいく。「その他」と回答のあった1園は1週間に一度、年長クラスにおいて物語や昔話などのストーリー性のあるものを読み聞かせることから毎日取り扱っていないという内容であった。しかしながらどの園においても、先生の読み聞かせを聞いた後、自由遊びの時間に、子どもが同じ絵本を手に取り自分で見たり読んだりする姿も教員に目撃されている。浜島(1984)によると、絵本タイムはつなぎに使わないで、独立した時間として考えなければならない^[8]と提起しているが、実際の保育現場では1日の慌ただしいスケジュールの中で独立した時間を設定することが難しく、昼食前や降園前などそれぞれの園での必要に応じて行われていることも明らかとなった。

表7. 所属園での読み聞かせ

1日の読み聞かせ冊数	人数
1冊	4
2・3冊	5
5冊以上	2
その他	1
計	12

表8. 所属園で使用されていた絵本の種類

絵本の主人公	絵本のタイトル
虫	のせてのせて
河童	ごあいさつ
おばけ	もこもこ
キャラクター	いないいないばあ
(ディズニー・アンパンマン)	たんたん
	わんぱくだん
	だるまさんが

次に最近読み聞かせた絵本をたずねたところ、表8のように虫・おばけ・河童などが物語の中心に描かれている絵本が多かった。これはインタビュー時期が夏であったためセミやカブトムシなどイメージに合った絵本が園でも選択されていることと、月刊絵本に登場しているおばけにちなんで子どもが自然とおばけに興味を持ち、保育者に読んでもらいたい絵本を差し出すために偏りが見られた回答であった。しかしながらどの園も同じ種類の絵本を選択し、その理由もほぼ同様であった。虫の絵本を選択している様子から、外遊びや普段のかかわりも想像することができ、子どもの手渡し絵本を教員が読み聞かせの材料としている教育方針から子どもの目線に立った教育がなされている様子をうかがい知ることができる。また、絵本のタイトルには繰り返しのある内容や動きの見られるもの、あいさつや擬音語擬態語を使用した絵本などが取り上げられていた。いずれも子どもが参加しやすい絵本が取り上げられていることが想像できる。子どもの年齢が上がるにつれて、行事や季節、子ども自身の興味から選択される絵本に幅が表れてくるが、それま

では、保育者がある程度、日常生活において必要な事柄が示された絵本を選択しているように思われる。

次に、絵本の読み聞かせを行うことで、どのような効果が見られたかについてたずねた質問では、実際の保育場面を想像することができるような具体的な内容が多く見受けられた（表9）。事例を挙げながら考察をすすめることとする。

表9. 絵本の読み聞かせ効果

インタビュー回答内容
A 言葉では表現できないが、場面に合った表現方法を理解しようとする
B 行事の前に絵本で読み聞かせ、イラストやストーリーで学習できる
C 話の続きを想像して考えたり、ストーリーを振り返ってみたり、一人ひとり読み終わった時に違った感情が持てる
D 虫同士が生きるために闘っていること、「生きる」「死ぬ」ことも知ることができる
E 謝る気持ちや許す気持ちを生まれさせ、成長させることができる
F 発言の場と変化することができる
G 集団行動を行うことができグループでの集中力が高まる
H (絵本の読み聞かせが始まる雰囲気や先生の言葉かけで)片付ける習慣が身についている
I (文字を読んでいくと興味があり先生役をしてくれる子どもが現れる

Aは1歳児クラス少数人数での読み聞かせ場面である。子ども本人がなかなか言葉で表現できないため、ふさわしい場面に遭遇し「ありがとうだね。」「『ちょうだい。』はこうだね。」など「こうだね」と確認をすると頭を動かしたり手を動かしたり本を指さしたりすることがあったため「わかっているんだ」と感じた保育者の回答であった。これは、子ども自身が言葉を話す大人や年齢の少し上の子どもを見て、コミュニケーションに期待を抱いているのであろう。これらの絵本を通じて何度も繰り返し保育者側から積極的にコミュニケーションを図っている様子が見えがえた。

B、Cに関しては4歳児クラスの出来事である。その場のコミュニケーションだけではなく、読み終えた後に行事があり予習のために使用されていたり、読み終えた後の感情を子どもそれぞれに持ってほしいという保育者の思いが込められていた。Bは、実際に避難訓練を行う前に絵本で読み聞かせ、なぜ避難しないといけない状況なのかをイラストで教育する。訓練体験後「火はこわいんだ」という学習にもつながるといふ。Cは、「やさしいライオン」の読み聞かせ後に、話の続きを想像して考えたりストーリーを振り返るなどして、善し悪しなどの道徳的な概念を持ち一人ひとり読み終わった時の違った感情があつてよい、との回答であった。このように思考力を高めるものや感情表現を豊かにしたり判断をさせたりする絵本が取り上げられていることが理解できた。また浜島（1984）によると4・5歳は好奇心や自己拡大欲のかたまりの時期である^[8]ため、探求心や競争心などの内容のお話であっても同様に受け入れられる能力が身に付いているのではないかと考えられる。

Dを回答した保育者はフリー担当であり、延長保育の時間に保育者自身の思いを込めた読み聞

かせを行っているとの回答であった。昆虫などが登場する絵本を読み聞かせ、「実際に子どもが虫を見つけた後に『生きている』ことや『死ぬ』ことも教えたい。かわいいイラストの虫も大切だけど、虫同士が生きてのために闘っていることを知ってほしい。闘っていても、どちらも悪くないし、生きていくために大切なことである。」と述べていた。そのことが最終的には語彙を増やしたり、ストーリーを想像することに結びつくのではないかと保育者自身が考察し実行している例である。

E、F、Gにおいては、5歳児クラスの出来事である。ある程度、自分自身で身の回りのことをスムーズに行える反面、保育者の見えないところでのトラブルも絶えないとの回答であった。しかしながら、この点に関しては全保育者が発達と捉えており、その発達の段階でいかに子どもの自尊心を傷付けることなく保育を行っているかという様子がうかがえた。Eに関しては、些細な喧嘩の仲裁を保育者に委ねるのではなく、子どもたちが自分たちで考え判断してほしいという気持ちも込めて絵本の読み聞かせをすることにより、謝る気持ちや許す気持ち、仲裁に関わるなどの様々な感情を育てていることと理解できる。またこのような達成体験が子ども同士の結びつきを強めたり、自己効力感を高めたりしているのであろう。F、Gに関しては集団の読み聞かせ場面において、子どもたちが園での読み聞かせスタイルを確立できているため、環境として絵本の世界に入りやすくなっていることはうかがえる。特にFに関しては、「絵本の読み聞かせ最中に質問を投げかけると普段あまり積極的ではない子どもが皆と一緒に発言できていたり、ある時は他の子どもより発言数が増えていたりする。」と回答しており、物語の内容や保育者の働きかけによっては、そのような効果もうかがい知ることができた。

Hに関してはGと同様で、園において読み聞かせの時間が設定されているため、子どもが読み聞かせの時間になると片付け始める。また一定の場所での読み聞かせをすることなく、意図的に読み聞かせの場所を変えるという回答であった。「きれいになったこの場所で絵本を読もうっと」などの保育者の発言により、玩具の片付けを子どもに進んでさせることや遊びの変化に区切りをつけることができる。

Iに関しては、「一度読み聞かせを行うと、自由遊びの時間に再現するようになった。」との回答であった。これは「学ぶ」は「真似る」と同じ語源であることも納得がいく。また文字に興味を持ち、わかる喜びや読める自信などにも結び付いているのではないかと想像できる。

(2) 保育者の学生時代の振り返り

「言葉」の授業の有無に関わらず、多くの対象者が「現場での体験談をもっと聞いておきたかった」と回答している。詳細は「実習でたずねた園以外の様子を知りたかった」や『『保育士になれるのだろうか』という不安な気持ちを払拭したかった』との内容であった。

学生の頃の振り返りに関して、インタビュー内容としては、対象者が4年制大学、短期大学、専門学校などの養成校において保育内容「言葉」に関連する授業を受講したかどうかについてたずねた。結果を表10に示す。

表10. 養成校での「言葉」の授業について

「言葉」の授業	人数
存在した	7
存在しなかった	2
覚えていない	3
計	12

保育現場経験の長い対象者は養成校卒業後5年経過しているため記憶に残っていない場合も見られた。また「言葉」に関する授業が存在しなかった2名に関しては、「表現」という授業の中で、造形や言葉などの表現全般を扱っていたという結果であった。

次に「言葉」に関係した授業内容について受講した7名に詳細をたずねると、2名は手遊びや創作ダンスなどを中心に授業内での取り組みを回答していた。これは、「言葉」の授業ではもちろん、身体表現やリズムなど「言葉」以外の領域が関連づけられて授業が展開されていたものと考えられる。また3名は絵本の読み聞かせを中心に授業が展開されていたとの回答であった。特にその中の1名は15回全ての授業において教科書のように『もこもこ』（谷川俊太郎作）を用いた読み聞かせが行われていたことを記憶しており、養成校教員から特に文字表記が少なく、擬音語・擬態語などを用いた絵本の読み聞かせに関して、丁寧な指導が行われていたことが想像できる。徳永（2009）によると言葉を獲得する以前の世界を生きている赤ちゃんたちは、言葉でわかる前に絵本の中の言葉と絵を感覚で受け止め、リズムのある言葉で擬音語・擬態語が心に届き、楽しみの世界を作り出している^{〔9〕}と述べており、対象年齢が1歳からとされている『もこもこ』のような絵本であっても、様々な年齢に対応できることが証明されている。また2名は、実際に園で長年勤められた先生が体験談を講義内で話してくれた内容が印象深いとの回答であった。中でも1名に関しては内容まで、鮮明に記憶に残っており、その内容とは「大事にしていた花瓶を割ってしまった幼児Aにかける言葉は？」というタイトルで先生になって考えてみるというものである。幼児Aにかける言葉、まわりの子どもたちが話す言葉や保育者がまわりの子どもたちにかける言葉などを想像して「けががなかったかどうか」の確認をすることや『大丈夫だよ』という言葉かけも、もちろん必要だが『Aちゃんが一番かわいがっていたから一番ショックだよね。』という本人の気持ちを認め、保育者がAちゃんの気持ちを言葉で表現する」という話を聞くことができた。

以上のことから、授業の内容自体は、担当教員の専門や得意分野などオリジナリティあふれるものであり各養成校によって様々であったが「言葉」に関連した授業では絵本を使用した授業展開や子どもに寄り添った言葉かけを教授していることが多いという点が明確であった。しかしながら対象者は、学生の頃を振り返り「学生の頃は絵本や紙芝居などの読み聞かせについて、実習に行っても読むことで精一杯で、子どもの環境を整えることなど考えてもいなかった。」や絵本の効果についても「文字が読めるようになるのではないかと、集中力が高まるから良いのではないかと思っていた。」などの声を聞くことができ、同じ「絵本の読み聞かせ」であっても、養成校

の教室内において行われるものと現場で行われるものとは、まったく質の異なることが容易に想像できた。

(3) 保育現場に就職して

保育現場に就職し、どのような点で苦労があったか、努力が必要であったか、また養成校で学んだ内容と異なる点やそのことで戸惑った内容などをたずねた。

まず、絵本の読み聞かせについては「現実とは全く違う。集中力をつけさせたいと思って読み始めてもざわついていたり、昨日はうまくいっても今日はうまくいかなかったりという日々。」と語るのは3年目の幼稚園教諭である。一方で2年目の幼稚園教諭によると「こちらが予想していなかった展開になり全員がこちらを向いている。結果的に集中力がつく場合もある。」との見解であった。こちらが「集中力をつけさせたい」と思い絵本を読み聞かせるのではなく、絵本の読み聞かせを行うことで、集団において自然と集中力が培われる。この点においては、もとより集中することのできる環境が整っていたことが考えられる。また、みんなと一緒に先生の読み聞かせを聞いているうちに、絵本が好きであるのは自分だけではないと気付くことや、自分がうれしいときはみんなもうれしく、自分が悲しいときはみんなも悲しい、という家での読み聞かせでは得られなかった感情が芽生える（西本，2003）^[7]という点でも集団生活の中での読み聞かせの意義は奥深いものである。また絵本学のすすめ（浜島，1984）の中でも、子どもは面白いとき、こわいときに隣の子と顔を見合わせたり、肩を抱き合ったりして感情を分かち合おうと体を寄せ合う^[8]と述べられている。そのため努力して得られる結果ではなく、読み聞かせ時の楽しさや一体感から自然と発生されるものであることが理解できる。そして西本（2003）は子どもに読み聞かせをするのは、彼らの知識を豊かにし正しいモラルを身につけさせるためと考えている人がいたとすれば誤解であると述べ、結果的に効果があったとしてもそれは目的ではない。子どもが絵本を見たり、読みたがったりするのは、わくわくどきどきしたいからである^[7]と説明しており、そのような環境を整えるためにいかに保育者が表現力豊かに読み聞かせを行わなければならないか、保育者の技量が問われるであろう。

また今回2名から「外国の子どもが多い園に就職したので異文化コミュニケーションが必要となる。」という回答が得られた。このことは園に外国人や2世などの子どもが多く存在している地域に特化したものであった。絵本を通して異文化理解を検討した研究（伊賀，1999）では、英語教育において高校生対象に外国の絵本を教材として活用している。その理由として初歩的に異文化に触れ得る教材である^[10]という点が挙げられている。インタビュー対象者の中には、外国の子どもが入園し様々な面で苦戦している様子などがうかがえる保育者も存在した。この点においては、高等教育の段階で異文化に触れ、理解する姿勢を持つことで、支障なく保育に携われるのではないかと考えられる。

IV まとめ

絵本の読み聞かせ効果に関して、「言語指導法」受講学生の意識調査と、現場経験のある保育者インタビューを行った。保育現場インタビューを通して、それぞれの園における絵本の選択や、教育方針、絵本を介したコミュニケーション方法をうかがい知ることができた。さらに、子どもの発達に応じた工夫や日々の葛藤などが見られた。

またインタビューを終えて、対象者に「自分自身がこんなに振り返ることができるとは思っていなかったので言葉にすることで改めて勉強になった」と感謝される一面もあった。

授業に関しては反省点が多く残ったが、いかに学生が就職した後に戸惑いなく保育者として力を発揮できるかにおいて、「言葉」領域における技術面や表現力を身に付けさせるべく様々な工夫が必要であることが明らかとなった。

今回の学生への意識調査と保育現場インタビューを通して、実際には保育現場へ就職した後に起こるかもしれない問題を予防できる1つの手立てを知れたのではないかと思われる。また次年度の「言語指導法」における授業内容や授業の展開について考えるよい機会となった。

最後に、本論文執筆にあたり、「言語指導法」受講学生に対して感謝するとともに、お忙しい中快くインタビューを引き受けて下さった幼稚園教諭、保育士の12名の先生方に対して心より深く御礼申し上げる。

引用文献

- [1] 濱田格子「子育て支援ツールとしての赤ちゃん絵本の開発と配布システムの構築」『関西国際大学研究紀要』第12号. 2011年. p.67-74
- [2] 齋木恭子「児童文化財を活用した保育実技の質的向上を考える」『鳥取短期大学研究紀要』第50記念号. 2004年. p.151-160
- [3] 松井寿美子「学生が読んだ絵本」『聖カタリナ女子短期大学紀要』第32号. 1999年. p.57-80
- [4] 桑名恵子「ブックスタートと絵本—絵本は子どもにどのように影響するのか—父親の読み聞かせ—」『千里金襴大学紀要』第7巻. 2010年. p.43-56
- [5] 工藤真由美「子どもにいのちの大切さ・死の問題を教えること—保育者養成課程在籍学生の絵本理解から見えてくる問題—」『四条啜学園短期大学紀要』第41巻. 2008年. p.26-30
- [6] 神垣彬子・中井靖「保育者養成における子どもの「ことば」を育てる視点の理解についての研究」『川崎医療短期大学紀要』第31号. 2011年. p.69-73
- [7] 西本鶏介『子どもがよろこぶ！読み聞かせ絵本101冊ガイド』講談社. 2003年
- [8] 浜島代志子『えほん学のすすめ』偕成社. 1984年
- [9] 徳永満理『赤ちゃんにどんな絵本を読もうかな—乳児保育の中の絵本の役割』保育が好きになる実践シリーズ. かもがわ出版. 2009年
- [10] 伊賀泰恵「絵本を通しての異文化理解」『広島大学附属中・高等学校研究紀要』第46号. 1999年. p.67-77

参考文献

- 子どもの文化研究所編『紙芝居—子ども・文化・保育 心を育てる理論と実演・実作の指導』一声社、2011年
- 小石寛文編『子どもの発達と心理』八千代出版、2007年
- 村松敦・杉七瀬・宇陀則彦「読み聞かせ時の反応に着目した絵本に対する子どもの好みの取得方法に関する検討」『日本教育工学会論文誌』32巻、2008年、p.125-128
- 村松敦・岡本穂高・宇陀則彦「絵本の読み聞かせにおける子どもの好みと絵本の主題との関係性」『日本教育工学会論文誌』34巻、2010年、p.93-96
- 無藤隆監修『ここが変わった！新幼稚園教育要領改定のポイントと解説』チャイルド社、2008年
- 中澤潤・八木龍浩・小野美紀・中澤小百合・菅治子「幼児の言語活動の発達に関わる要因分析」『千葉大学教育学部研究紀要』第1部第35巻、1987年、p.213-227
- NPOブックスタート編『赤ちゃん絵本を開いたら ブックスタートはじまりの10年』岩波書店、2010年
- 大場幸夫監修『ここが変わった！新保育所保育指針改定のポイントと解説』チャイルド社、2008年
- 小田豊・芦田宏編『保育内容言葉』新保育ライブラリ、北大路書房、2009年
- 佐々木宏子『絵本は赤ちゃんから 母子の読み合いがひらく世界』新曜社、2006年
- 沢宮容子「幼児が遊びに参加する際の言語的スキルの検討」『足利短期大学研究紀要』第19巻、1999年、p.1-7
- 汐見稔幸「幼児期の文字指導と言語教育をめぐって」『東京大学教育学部紀要』第20巻、1980年、p.295-307
- 戸田雅美編『演習保育内容言葉』建帛社、2009年
- 絵本の力①『日本経済新聞』2012年5月14日
- 絵本の力②『日本経済新聞』2012年5月15日
- 絵本の力③『日本経済新聞』2012年5月16日
- 絵本の力④『日本経済新聞』2012年5月17日
- 絵本の力⑤『日本経済新聞』2012年5月22日
- 絵本の力⑥『日本経済新聞』2012年5月23日
- 絵本の力⑦『日本経済新聞』2012年5月24日

受理日 平成24年9月27日